

# 改定保育所保育指針の研修会の取り組みについて

## Getting a Handle on Revised Chirldcare Policy Through Training Workshops

松本 千尋

### はじめに（研究の目的）

2009年4月、改定保育所保育指針が施行された。

保育指針が改定された背景には、子どもを取り巻く環境の変化と、保護者を取り巻く環境の変化が挙げられる。

長崎県では、平成21年度から22年度にかけて、保育現場に勤務するすべての職種に対して改定保育所保育指針の周知・徹底を目的とした研修会を行っている。

本報告では、研修会の取り組みを通して、保育指針の改定によって保育現場にどのような影響を与えているのか、そして研修会の中での「保育の環境について考える」というテーマの集団討議を中心に実践報告を行いたい。

### 1. 保育所保育指針改定の背景

少子高齢社会における今、子育て不安を抱える保護者が増加し、保育者の役割はますます注目されている。

家庭や地域におけるコミュニケーションの希薄化であったり、人や自然と関わる機会の減少に伴い子どもにふさわしい生活時間や生活リズムがつかれないことなど、子どもの生活が変化している。その一方で、子育てに関する不安や悩みを抱える保護者が増加し、養育力の低下や児童虐待の増加が指摘されてい

る。そのような中で、保育所における質の高い養護と教育の機能が強く求められていることから改定された。

また、今回の改定は告示化されたこともあり、法的な拘束力を持つものとなった。

告示化されたことにより、①厳守しなければならないもの、②努力義務が課されるもの、③基本原則にとどめ、各保育所の創意や裁量を許容するものなどを区別している。しかし、基本原則は、保育所の自主性、創意工夫が尊重されるということである。

改定のポイントとして、①保育所の役割の明確化、②保育の内容の改善、③保護者支援、④保育の質を高める仕組み等が挙げられる。

### Ⅰ. 研究の視点・方法

佐世保市の保育現場に勤務するすべての職種を対象とした保育指針の研修会では、保育指針の改訂についての周知徹底を目的とする講義と、「保育の環境について考える」というテーマで集団討議を行った。

本論では、「1. 保育の環境について考える（集団討議のまとめ）」、「2. 保育士の環境のとりえ方」「3. 改定保育指針の保育現場における影響」について研修会での報告をしたいと思う。

## 1. 保育の環境について考える（集団討議のまとめ）

### （1）調査方法

平成21年度、全6回の研修の中で、「保育の環境について考える」というテーマで、6名1グループになり、50分程度のグループ討議を行った。以下にグループ討議の内容をまとめ、現在の保育所の現状と課題としたい。

研修において、まず、全体説明を行い改訂保育指針の示す「保育の環境」について以下の簡単な説明を行った。

- ①指針の中で「環境」が意味するもの
- ②食育についての明確化（第5章）
- ③保護者支援について（第6章）
- ④養護と教育について
- ⑤子どもの主体性（総則）について
- ①について

指針の中では全部で47回「環境」という言葉が出てくる。指針の中での環境は、保育環境【第3章 保育の内容（二）教育に関わるねらい及び内容 ウ 環境 第5章 健康安全にかかわること 第7章 職員の研修の環境】等、環境についてのさまざまなとらえ方が記されている。以上の環境について園での取り組みや現状、課題等を討議してもらった。

#### ②について

今回の指針で食育について明記された。「食育基本法」を踏まえ、「保育所における食育に関する指針」を参考に、保育の内容の一環として食育を位置付けた。保育の養護的側面、教育的側面の内容に食育を盛り込み、各園で計画的に実施されることが求められている。食育に関する環境設定についても討議を行ってもらった。

#### ③について

保護者支援については、第6章 保護者に対する支援という独立した章が設けられた。保育所は特性を生かし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子

育て家庭への支援について積極的に取り組むことが求められている。支援センターを併設した保育園の環境設定や、園独自の子育て支援の工夫、保護者との連携の方法等、討議してもらった。

#### ④について

保育には子どもの現在のありのままを受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応していく養護的側面と、保育士等としての願いや保育の意図を伝えながら子どもの成長・発達を促し導いていく教育的側面がある。それらを満たすことのできる環境を作るための工夫や実践について討議してもらった。

#### ⑤について

第1章（総則） 3. 保育の原理（3）保育の環境にもあるように、保育所における保育の基本は環境を通して行うことであり、環境設定の重要性が記されている。子ども自らが関わる環境、安全で保身的な環境、温かな雰囲気と生き生きとした活動の場を創り出す環境、人との関わりをはぐくむ環境をどのように工夫し、創り出しているのか討議してもらった。

以上の全体説明後、グループ討議に入った。違う園の職員同士でグループを作るように配慮していただき、情報交換も兼ねて討議を行ってもらった。

以下は、全6回のグループ討議の内容をまとめたものである。10月下旬から始まり1月までの研修だったため、時期的な内容（新型コロナウイルス対策について）もいくつか見られた。

討議の中で話し合われた内容と、課題について以下にまとめる。

- 1) 保育形態・保育方針による環境に関する課題と問題点
  - ・縦割りクラス・横割りクラス

## 改定保育所保育指針の研修会の取り組みについて

- ・ 支援センター併設の保育園
  - ・ 夜間保育・延長保育
  - ・ 外国人受け入れ
- 園全体の安全に配慮した環境設定や、保育  
携帯による環境設定の工夫
- 2) 保育士自身の勤務形態による環境に関する  
課題と問題点
    - ・ フリー保育士と、クラス担当者との連携に  
ついて
  - 3) 保育園の立地条件による環境について
  - 4) 保護者支援について
  - 5) 未満児の保育室環境について
    - ・ 月齢によって活動・保育室を分けている報  
告
    - ・ 安全対策について
  - 6) 子どもの主体性を重んじた環境設定とは？
    - ・ 子どもが好んだものを選び、活動を援助す  
るための環境設定
    - ・ 魅力的に見える遊具と配置
    - ・ 見守る保育とは？
    - ・ コーナーを作り、子ども自らが遊びを選択  
できるように配慮した環境について
    - ・ 寝食別の保育室にする環境設定
    - ・ 子ども自らが考えて感じながら活動ができ  
るように援助する保育環境について
    - ・ 臨機応変に環境を変えていく必要性、環境  
の再構成の大切さ
    - ・ 自主性と、わがままの狭間での見守る保育  
とは？
    - ・ 危険と、主体性のはざまの保育環境
    - ・ 子どもを見る目を養うことの大切さについ  
て
  - 7) 支援センター・保護者支援に関する環境に  
ついて
    - ・ 母親のリフレッシュも兼ねて、母親が生き  
生きできるように配慮する環境作り
    - ・ 保護者支援が多くなりすぎると保護者の養  
育力低下につながるのでは？
    - ・ 個別面談や家庭訪問を実施
    - ・ 保育参観に参加していただき、給食も一緒

にとつていただく

- ・ 親が協力的で運動会等の整備も行ってくれ  
る
  - ・ 生活の連続性（家→保育園→家の連続）が  
できるよう保護者と連携をとる。
  - ・ 保護者によってケガのとらえ方が違うの  
で、伝え方等を配慮する。
- 8) 園庭・保育室の環境設定について
    - ・ ケガの増加、生活の中でも歩かない、自然  
にふれる機会を増やす
    - ・ 園全体の安全点検を定期的に行う
  - 9) 地域性を生かしたもの
    - ・ 小学校との連携、福祉施設・高齢者施設へ  
の訪問・地域との交流
  - 10) 近くの自然を体験、お祭りに参加、老人  
クラブの方に伝承遊びを教えてもらう、老  
人ホーム訪問など
  - 11) 保育園の立地の問題
  - 12) 食育の推進、方法等
  - 13) 時期・季節に関わる保育
    - ・ インフルエンザ対策・雪を取り入れた保育
  - 14) 子どもを取り巻く生活環境の変化
    - ・ 運動しない→転びやすい→体力低下
    - ・ 何が危険か分からない→経験不足

### 【集団討議の内容のまとめ】

- ① 保育指針にも唱われているように、子ども  
の主体性を重んじた環境設定について、各  
園のさまざまな工夫と取り組みが話し合わ  
れていた。主体性の大切さを感じながらも、  
安全性に配慮した環境作りについて工夫が  
されていた。
- ② 保育指針にも独立した章で唱われた「保護  
者支援」についての内容も多かった。保護  
者支援の大切さは保育士も感じているところ  
だが、延長保育、休日保育等、保護者支  
援が保護者から子どもを離している現状が  
あるのでは？という課題も発表された。保  
護者・保育士が共に子どもの成長を楽しめ  
る環境を作り出すことが保育所には求めら

れている。

- ③長崎県は豊かな自然に恵まれており、それぞれの地域で地域の特色を生かした保育が展開されていた。また、保育所の恵まれた立地条件のところとそうでないところがあったが、保育士が知恵を出し合い、子どもの十分な活動が展開できるような環境作りが工夫されていた。

- ④食育について、今回の指針の中では養護と教育の視点から計画的に行っていくように求めている。

討議のグループの中には調理員のグループもあり、保育士と連携しながら食育を行っている報告がされていた。野菜を育て、収穫し、調理の様子を見て実際に食し、その野菜がどのように体に吸収され、栄養になるという一連の流れを年齢に応じて体験し、伝えていた。実践の様子が活発に報告されていた。

## 全体のまとめ

平成21年度に「環境」について討議をした中で、どの会場でも話題にあがった内容が、猛威を振るった新型インフルエンザに関してであった。この内容についても第5章にある健康及び安全の「疾病等への対応」と大きく関わる内容である。その背景には、前例がないことへの対策と、子どもの健康・安全を守る保育所の立場、働く母親を支援する保育所の立場とがあった。

子どもの育ちを保護者・保育士・地域全体が見守る社会を作りあげていくことが大切なことであると考える。

今回の指針の改訂が行われた背景について、「子どもを取り巻く環境の変化」があるが、子どもを育てる家庭・地域・社会環境の子育て力が弱まった状況が背景にある。その中で保育園に求められるものが多く・重くなっている現状がある。移り変わる社会情勢、それらの背景も見据え、どのように保育を行うかが、

今後の保育士の課題であるといえる。

## 2. 保育士の環境に対する考え方

### (1) 調査の方法

研修会に参加した佐世保市内の保育士386名にアンケートを行った。

アンケート調査を行う上で、保育士の年齢によってどのような環境のとらえ方の違いがあるのか、また、改定保育指針が保育現場にどのような影響を与えているのかに着目した。

### (2) アンケートの内容

全10項目について設問を設定した。本報告では、その中の「年齢」「保育環境の中で一番配慮しているところはどんなところですか?」「保育指針は読みましたか?」「関係するところ(興味のあるところ)を読んだ方はどの部分を読みましたか?」以上の質問に焦点を絞って報告を行いたい。

### 【アンケート集計】

年齢	人数
20代	103
30代	100
40代	100
50代	78
(無回答)	5
総数	386

20代～40代まではほぼ同数の保育士・調理員が研修に参加していた。

次に、保育環境の中で一番配慮しているのは①人的環境②園舎内③園庭④その他(複数可)どんなところですか?という質問を行った。

## 改定保育所保育指針の研修会の取り組みについて

項目	人数（名）
人的環境	246
園舎内	109
園庭	79
その他	29
すべて	59
回答なし	23

「人的環境」について一番配慮しているという意見が圧倒的に多かった。

環境とは、子どもを取り巻くすべてのものが環境であり、人的環境・物的環境すべてを含む。アンケートの記述欄を見ても子どもの見るもの、触れるもの、感じるものすべてが配慮すべき環境であるといった内容や、保育自身も重要な環境の一つだということを再認識したという意見、また、子どもを取り巻く環境が変化しているのも、それに伴い保育のあり方も考えていく必要があるという意見も見られた。

### 結果

保育環境の中で保育士が一番配慮していることは「人的環境」であるという結果であった。また、子どもを取り巻くものすべてが環境であると回答していただいた内容もあった。

### 今後の課題

今後は、年齢、保育歴と環境のとらえ方についての比較を行いたいと思う。筆者は、保育歴の長さと共に、人的環境を重視する保育士が増加するのではないかという仮説を立てているが、今後の課題にしたいと思う。

「環境」というと、物的環境を思い浮かべがちであるが、子どもに関わる保育士自らが子どもにとっては大切な「人的環境」といえる。

今回の改定の第7章（職員の資質向上）には「職員は、子どもの保育及び保護者に対する保育に関する指導が適切に行われるように、自

己評価に基づく課題等を踏まえ、保育所内外の研修等を通じて、必要な知識及び技術の習得、維持及び向上に努めなければならない」とある。このように、自己評価を行い、日々の保育について振り返り、今後の保育に活かすように求められている。

集団討議の中で、保育士自身が「人的環境」の一部であることを理解し、どのように保育にあたればいいのか、日々振り返る必要があるという意見もあった。また、保育士が心に余裕をもって保育にあたるためには、保育士自身の体と心の健康を保つことも求められている。

また、今回の研修は、職場外研修としての講義、グループ討議を行うもので、自己研鑽や、専門性の向上の意味でもとても意義のあるものといえる。この研修等に関しても施設長には難しい勤務体制の中、十分な研修を行う時間を確保することが求められている。

## 3. 改定保育指針が保育現場に与える影響について

保育指針は読みましたか？

項目	人数（名）
すべて読んだ	129
関係する（興味）ところだけ読んだ	172
読んでいない	91
無回答	8

### 結果

関係するところ（興味のあるところ）だけ読んだという方が多かった。そこで次の質問を行った。



関係するところ（興味のあるところ）だけ読んだという方はどの部分を読みましたか？

項目	人数（名）
1章	48
2章	93
3章	108
4章	64
5章	24
6章	24
7章	20

## 結果

第3章 保育の内容を読んだ方が多かった。次に第2章 子どもの発達であった。

第3章の内容は第1章（総則） 第2章（子どもの発達）に示されたことを踏まえ、保育所の「保育の内容」について述べている。この章は、養護と教育に関わるねらい及び内容が示され、保育計画に関わる部分の多い章であるので、保育士の関心も高いと予想する。

第2章の内容は、発達過程が書かれており、就学前の子どもの発達過程を8つに区分して、それぞれがどのような特徴があるのかを述べている。これらの発達過程を普段の保育に活かしている様子がうかがえる。

保育指針が改定され、保育の変化や意識の変化はありましたか？

項目	人数（名）
変化あり	255
変化なし	80
無回答	65

## 結果

「変化あり」と答えた方でどのような部分で変化があったのか自由記述をしてもらった。

【自由記述】（一部抜粋）

- ・以前よりも一人ひとりの子どもをしっかりと見るようになった。
- ・向上心が高まった。

- ・保育計画がより綿密になった。
- ・保護者への支援を心がけるようになった。
- ・毎日、自分の保育を評価、反省し、記録することによって、その日のことをじっくりと振り返ることができるようになった。
- ・保育園独自のものを作るので、職員間の意識が変わった。
- ・計画を立て、保育の内容が充実した。
- ・食育についての詳しい知識が必要になるので、勉強が必要であると感じた。
- ・子どもの主体性を大切にしようという意識が出てきた。

以上のような意見が多かったのだが、一方で・書類が増え、負担になっている。という意見も見られた。

## 結果

全体的に指針を活かしながら保育を行っている保育士が多くみられた。また、専門職としての意識が高まったという意見が多かった。園単位でも研修会を開いて指針についての学習を進めているところもあった。

指導計画・日案・月案などの書き方等について学習している園もあった。

まだ施行されて間もないので、指導計画等、園の中でも試行錯誤している様子がうかがえる。

長崎県内で指導計画等のフォームがあるものの、実際の子どもの様子を見ながら、保護者・保育士・看護師・調理員、保育に携わるすべての者が子どもの望ましい成長のため連携をとりながら柔軟に計画・記録を作成することが望ましいと考える。

保育指針の改定は、保育現場の保育士には大きな影響を与えていることが分かった。

## おわりに

保育指針の現任研修に参加させていただいたのであるが、私たち養成校としての使命は、現在の社会情勢を見据え、子どもたちの置か

れた状況を把握し、子どもたちの望ましい育ち、最善の利益のために何ができるか考え、行動できることのできる保育士を育成することである。

保育士の働く保育所・福祉施設は社会の今を映し出す世界である。日々変化する社会情勢の中で今後未来を担っていく子どもたちをどのような想いで育てるか、そしてその核となる保育士をどのように育成するか養成校の責任は重いものである。

この責任を感じ、今後も学生と共に子どもの最善の利益のために何が必要で何ができるか一緒に考えていきたいと思う。

#### 引用文献

「保育所保育指針解説書」 厚生労働省編  
「よくわかる保育所保育指針」ひかりのくに株式会社